

宋版一切経の舶載に係る一、二の問題

——実賢・〔頼賢—実融〕という相承に沿って——

牧 野 和 夫

はじめに

宋版大蔵経を始めとする宋代に出版された仏書に関する研究の急激な深化は、2000年代の着手当初の大蔵経書誌的調査段階で解明をみた「事実」の先に、多くの課題を抱えることになった。我が国の版本研究に刊・印・修が必須の調査事項であることは言うまでもないが、宋代の舶載大蔵経も、入れ木・印面の調査を要するケースが著しく増えつつある。日本に舶載の後、幾多の災厄をくぐりぬげ遍蔵を経つつ護持されてきた大蔵経が比較的数量多く現存する故である。福州版以降の大蔵経の書誌的な研究は刊・印・修の視点に立って検討を繰り返しつつ、新たな知見を積み重ねていく他に手立てはないのではないか。ここに近時抱

えるに至った一、二の問題点を提示しておきたい。勿論、解答のないままの、単なる問題点の指摘と報告に終わることとは必定である。

一、下醍醐奉納の頼賢将来宋版一切経一蔵セットについて

近時の宇都宮啓吾氏「智積院蔵『醍醐祖師聞書』について―意教上人頼賢とその周辺を巡って―」（『智山学報』64号 2015・3）及び同氏「智積院聖教における「東山」関係資料について―智積院蔵『醍醐祖師聞書』を手懸かりとして―」（2015年8月「日本語の歴史的典籍国際研究集会「紀州地域と寺院資料・聖教―延慶本『平家物語』の周縁―」紹介の『醍醐祖師聞書』に拠って、意教頼賢

の入宋船載の一蔵分が「下醍醐」に奉納されたこと、その船載の経緯については、頼賢の師遍智院成賢の入滅に際して、弟子の頼賢に示された遺志を受けて実行したことなどが知られるに至った。更に、慶政は、頼賢にとって「ヲヂ」に当たる縁戚関係にあり、慶政は、自ら創建した西山法華山寺の後継に、頼賢を据えようとの意向があったことも知られたのである。

「頼賢の法華山寺での活動」として、宇都宮氏は、次の記事を紹介された（本文は宇都宮啓吾氏「智積院聖教における「東山」関係資料について―智積院蔵『醍醐祖師問書』を手懸かりとして―」（国際研究集会「紀州地域と寺院資料・聖教―延慶本『平家物語』の周縁―」2015・8・1 於国文学研究資料館）の報告資料に拠る）。

〔略〕遁世ノ間□ノ峯堂ニ ヲヂ御前ノ三井寺真言師ニ勝月上人ノ下ニ居住セリノサテ峯堂ヲ付屬セムト仰アリケル時峯堂ヲ出給ヘリ其後律僧ニ成テ高野山一心院ニ居其後安養院ノ長老ニ請シ入レマイラセテ真言ノ師ニ給ヘリ

とりわけ大藏経将来に係る「頼賢入宋」の事実として挙げられた資料が次の記事である。

「遍知院御入滅ノ時此ノ意教上人ニ付テ仰テ云ク我ニ四ノ思アリ遂ニ不成ノ死ヌヘシニ一切経ヲ渡テ下ノ西西ニ置キ

タシニ遁世ノ公上ニ随フ間不叶シテ死スヘシニ法花経ヲ千部自身ヨミタカリシ不叶 四ニ青龍寺拜見セムト思事不叶頼賢申テ云ク御入滅ノ後一々ニ御願シトケ申サル其後聽遁世セリ聽入唐シテ五千卷ノ一切経ヲ渡シテ下西西ニ経蔵ヲ立テ、納也此時意教上人ハ青龍寺拜見歎不見也御入滅後三年ノ内千部経ヨミテ結願アリノ事悉皆御入滅後叶給ヘリ」（6表〜6裏）

成賢の没年は寛喜三年（1231）、よって寛喜三年以降の三年以内に法華経千部読誦を成就していた、という。遁世の後、直ちにヲヂ御前にあたる慶政の膝下、即ち峯堂（法華山寺）に身を寄せた頼賢が、自ら入唐して一切経を将来し下醍醐に建立した経蔵に収めたことがわかる。

『醍醐祖師問書』に記された内容は、既に頼賢入宋将来の大藏経について紹介した随心院蔵『証道上人集作』（『証談鈔』とも）所収の「實賢事」の内容を補って余りあるものがある。『証道上人集作』については、書誌事項などを含め、全文を『随心院聖教と寺院ネットワーク』1集（2004年3月）に翻刻紹介したので参照願いたい。

一 實賢事

仰云實ハ勝賢ニ遂灌頂ハ四月也僧正ノ化界ハ七月ナリサル程ニ受法不終功ノ其後範賢並辭

遍^ニ三寶院方^ヲハ受給ケルトカヤ故意教上人

唐本ノ一切経ヲ自ラ宋朝ヨリ請来セラレタリ 此ノ

一切経供養ヲ西西^{ニテ}被遂^ニ導師^{ニハ}實賢^ヲ召請

シ玉ヘリ其時實賢唱導ノ次ニ面々ノ院家ヘ

参テモ可申^一候ヘトモ今次能候ヘハ述懐申ヘ

シトテ静遍^ノ許^{ヨリ}三寶院ノ方^ヲハ伝授ス其外尚

範賢^ニ相承ス是故^ニ我身^ハ遍知院^{ニハ}孫弟也相

構門徒ノ人々我身不可隔^ニ云々 一

本書には、二十九丁裏に成立に関する原奥書

「寫本云

于時正中第二曆沽洗三月下旬之比有人

受師主口傳^一当流書籍以下存知事被

記之予此事聞得^テ懇望之間被許披覽

了仍此三帖誠七句老眼寫留了但根

本之本卷物即雙子^ニ成畢

金剛資、心曉七十二才」

がある。「証道上人実融に受法した「有人」が実融の口

伝による「当流（三寶院流カ）書籍以下存知事」を記し留

めたものであり、実融の伝法を知る上で極めて貴重な内容

を含むものである。実融の師は、意教上人頼賢であり、こ

の原奥書を文字通り信するならば、掲出の一項「実賢事」

に「記留」められたように、意教上人は「唐本ノ一切経ヲ

自ラ宋朝ヨリ請来」し、実賢を導師に請じて醍醐寺で「一

切経供養」をしたのである。おそらく唐土より帰国して間

もない頃のことであった、と思われるのである。」と記述し

たが、何故、醍醐を去り遁世に及んだ頼賢が改めて醍醐寺

に宋版一切経を施入したのか、更に供養導師に實賢を請じ

たのは何故か、不詳とする点であった。

また頼賢が、何故、慶政の法華山寺を舞台にして入宋・

帰朝したのか、約五、六年間に及ぶ法華山寺で遂行された

松橋本『覚禅鈔』の書写活動を挟んで、数年の後に高野山

へ移り實融などに松橋本『覚禅鈔』を書写させたのか、と

いう疑問をも含めて、その一連の行動の背景がほぼ的確に

把握できることになったのである。

慶政は、頼賢にとって「ラヂ御前」に当たる縁戚関係に

あったことが明らかになり、初めて頼賢が慶政の法華山寺

を舞台にして入宋・帰朝することになった経緯が見えてき

たのであり、資金的な問題も含めておよそ推測できること

になったのである。その入宋の理由の主要な点が師成賢の

遺志の成就にあり、成賢の切望した「下醍醐」への宋版大

蔵経の奉納という一大事業を、並み居る嫡流の院家を前に

頼賢は師になり替わり「實賢」を導師にして見事に果たし

たのである。約五、六年間に及ぶ法華山寺で遂行された松

橋本『覚禅鈔』の書写活動をも含めた一連の動きが、実は

当時の醍醐寺内の一部（鎌倉方の實賢に代表される）とも連携する裾野を持っていた。法華山寺を介して慶政の許で展開していた広範囲に及ぶ九条道家の布石ともいべき目配りが既に存在していたようである（建長三年の了行の一件に伴う「勅勘」に際して頼賢などその災いを逃れえたことが留意される）。しかも慶政は自ら創建した西山法華山

寺の後継に、頼賢を据えようとの意向があったことも知られたのである。頼賢が嶺堂の継承を辞退し（その経緯については、不詳とする他ないが、前述の了行の一件の顛末と併せて、若干の推測は可能であろう（牧野和夫「中世前期学僧と近世書写一寺院縁起をめぐる二、三の問題」〈『実践国文学』76号 2009・10〕参照）。「律僧二成」つた後（甲田宥咩氏「意教上人傳攷」に、この時期の宝治元年（一二四七）七月一日『自誓受戒記』に「比丘頼賢」の名があること指摘あり）、高野山上（安達氏とのゆかりか）に拠りどころを見出したことで、「証道房実融」をめぐる人々に「意教上人が入宋し大藏経を将来し醍醐寺に収めた、しかも實賢を導師にして供養が行われた」という随心院藏『証道上人集作』所収口伝が辛うじて残されたことは確かである。宇都宮啓吾氏は智積院藏『醍醐祖師問書』について「本書の「頼賢伝」（頼賢の入宋と法華山寺慶政治との関係）は意教流、特に、東寺地藏院流寛雄方相承の中にお

いて伝えられていたものと考えられる。また、本書が、家原寺聖教の一つであることから、家原寺を拠点とした律家側の資料として文章家されたものと考えられる。」と記しておられる。頼賢・思融などの法系に伝来した口伝と考えるべきであろう。

即ち、この両資料は、「実賢―良胤―良含―静基」の血脈や「實賢―如實―思融―實融」という相承の枠内でのみ生き続けた「事実」であり、醍醐寺の嫡々の院家には「忘却」を必然として不思議のない事柄であった。實賢（道家の帰依を背景にした「権威」を以て座主に就いた「賢海」、實賢は嘉禎二年に賢海から座主職を譲られている）が「唱導ノ次ニ面々ノ院家ヘ参テモ可申一候ヘトモ今次能候ヘハ述懐申ヘシトテ静遍ノ許ヨリ三寶院ノ方ヲハ 伝授ス其外尚範賢ニ相承ス是故ニ我身ハ遍知院ニハ孫弟也相構門徒ノ人々我身不可隔」との述懐を述べたことは、この血脈相承の内側に脈々と伝承され辛うじて現在に生き残った情報として貴重なのである（これらの点については、牧野和夫「延慶書写時の延慶本『平家物語』へ至る一過程―実賢・実融―一つの相承血脈をめぐる―」（『アジア遊学 延慶本と根来』近刊）参照）。この頼賢将来・下醍醐施入の宋版一切経を、九条道家の許に行われた慶政・成阿弥陀仏の勸進活動などの起伏に富んだ事跡の中に置いて展望する時、奮然の蜀版大藏

經將來に発した宋版大藏經將來・施入を巡る撰関家・諸社寺の活潑な動きが、鎌倉中期以降において新たな形で展開していたことが明らかになる（鎌倉方の動きが絡む）。以下に略年表の形で示す。

- 建保五年（一二二七）慶政、宋から明恵に書状を送る
- 承久元年（一二一九）慶政、法隆寺舍利殿の再建開始（翌年完成）
- 承久二年（一二二〇）二月、後の後嵯峨天皇、誕生。
- 承久三年（一二二一）道家、摂政に就く。五月以降、承久乱。乱後、近衛家実が摂政になる。
- 嘉祿二年（一二二六）（或いは三年）慶政、西山に法華山寺創建
- 嘉祿二年（一二二六）東大寺僧秀恵、東大寺八幡経巻第一書写、「比丘尼成阿弥陀仏此経勧進之根源」と。（）安貞二年（一二二八）迄に書写完了か）
- 安貞二年（一二二八）道家、家実に変わり関白になる。
- 寛喜元年（一二二九）夏、東大寺八幡経を納める御経蔵造営の為の勧進始まる（仁治二年（一二四一）迄）
- 寛喜三年（一二三一）二月十二日、後の四条天皇、誕生。
- 九月十九日、醍醐寺成賢、七十歳にて入滅。これ以降、

頼賢は遁世、慶政の峯堂に居住。

- 寛喜四年（一二三二）尼成阿弥陀仏、「奉建立大般若台一字／奉安置白檀釈迦牟尼如来像一鉢」、その他に東大寺八幡宮に大般若会創始、大般若経一部など施入。（『東大寺統要録』）
- 貞永二年（一二三三）十月四日、後堀河天皇讓位し、四条天皇踐祚。
- 天福二年（一二三四）上宮王院太子御影安置供養、導師璋円、大願主慶政並真（信）如（別当記）
- 嘉禎二年（一二三六）實賢、醍醐寺座主に補任
- 嘉禎二年（一二三六）慶政、法隆寺藏『法華義疏』の表装替えを行う。「唐本御影」の表装替えも同時に行われたか
- 同年（一二三六）夏、了行、宋より帰国、『観音玄義科』を將來。頼賢もまた、この頃に、入宋・帰朝か。
- 嘉禎三年（一二三七）正月、近衛兼経、九条道家の娘仁子を妻に迎える。三月、道家、兼経に摂政を譲る。
- 嘉禎三年（一二三七）行遍、東寺四長者。
- 寛元元年（一二四三）この頃より意教上人頼賢、慶政ゆかりの西山法華寺（法華山寺）にて『覚禪鈔』書寫を始め、寶治元年（一一四七）頃まで書寫（萬徳寺本により確認。『佛教美術研究上野記念財團助成研究會

報告書「画像蒐成」H-V)。

寛元四年(一二四六)後嵯峨天皇、後深草天皇に讓位、院政を始める。六月九日、宮騷動。七月將軍頼経、京都へ追放。執権経時、執権職を時頼に譲る。経時没。

十二月、行遍、大僧正に昇補。

寶治元年(一二四七)近衛兼経、再度、摂政となる。

十二月、実賢、二長者補任。

行遍、三長者へ。寶治合戦、三浦一族、上総千葉氏秀胤ら滅亡。安達景盛主導か(実賢が醍醐寺僧として百年ぶりに東寺一長者に就任できたのは、その効験に対する朝幕の配慮あり、との平雅行氏の説あり)。叡尊

像胎内『自誓受戒記』に「頼賢」の名あり。十八代伝

法院座主定親、失脚(宝治合戦、三浦氏との縁)。

十一月、十九代座主に教禪(覚諭の弟子)補任。

● 寶治二年(一二四八)朝廷側、行遍を、寺務、法務、

四月、護持僧とする。十二月、實賢、一長者に補任。

同月二十九日、高野山の本末騷動により行遍は東寺寺

務職を止められる。おそらく、寛元二年以降、宝治二

年十二月二十九日までに行遍、東寺へ宋版一切経(宣

陽門院御所持之御経)を奉納か。

● 寶治三年・建長元年(一二四九)九月四日、実賢、入

滅(七十四歳)。

● 建長三年(一二五二)正月、泰胤卒。足利泰氏、「自

由出家」。十二月、了行・矢作

左衛門尉らの謀反事件。

建長四年(一二五二)慶政、憲靜勸進の『四分律刪繁

補闕行事鈔』に捨財。

建長四年(一二五二)二月二十一日、道家、逝去。

かくて、中世のある時期に醍醐寺の寺域内には、最低二セツトの宋版一切経が存在した、と考えて不都合のない「事実」が浮上してきたのである。

『南無阿弥陀佛作善集』に記された重源将来献納の一蔵の宋版大蔵経、即ち上醍醐に重源船載の宋版大蔵経の一蔵分が存在していたことも明らかであり、新たに「下醍醐」に成賢の遺志を以て頼賢が将来施入した宋版大蔵経の一蔵分が存在していたことも確かである。少なくとも鎌倉中期頃には、醍醐寺には二セツトの宋版大蔵経が、上・下醍醐に各々備えられていたことになるようである。しかも、頼賢将来の宋版大蔵経を供養するに際して導師を勤めたのが、他ならぬ安達景盛の後押しを得て異例ともいべき形で加任し、後に東寺一長者に就いた實賢であった(平雅行氏「鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶―良諭・光宝・実賢―」『徒兼山論叢』43号 2009・12)。近時、関連

して、同氏には「大伝法院座主職と高野紛争」（シンポジウム「根来寺史をめぐる新たな視界」〈2015・3・8於京都・芝蘭会館別館〉）と題した発表があった。

二、東禅寺版大蔵経の内『宗鏡録』卷七十一について—同版二点と醍醐寺

『醍醐寺叢書 醍醐寺蔵宋版一切経目録』第四冊（2015・3 汲古書院刊）に拠ると、醍醐寺蔵東禅寺版大蔵経の内『宗鏡録』卷七十一について次のような書誌事項が記載されている。

- 「
〔函前面〕（墨書）策／宗鏡録
／第八帙
〔函前面左側貼紙〕（墨書）策
五百二十
一／拾壹帖
〔函底〕（墨書）五
〔蓋裏〕（墨書）天六十

5315宗鏡録卷第七十一

〔譯撰者〕慧日永明寺主智見禪師延壽集

- 〔外題〕宗鏡録卷第七十一 策
〔内題〕宗鏡録卷第七十一 策
〔尾題〕宗鏡録卷第七十一 策
〔表紙〕紺色
〔紐〕（缺）
〔題記〕福州等覺禅院住持傳法沙門普明収印経板頭錢恭爲／今上皇帝
祝延聖壽闔郡官僚同資祿位彫造／宗鏡録一部計一十函時大觀二年六月日謹題
〔捨錢刊記〕（無）
〔刻工名〕丁宥〈二〉〈二〉〈四〉〈八〉〈十〉、宥〈三〉〈五〉〈七〉〈九〉、
丁宥刊〈六〉〈十二〉
〔卷末刻紙数〕十一帙
〔印造印〕「福州東禅寺経／生葛紹印造」
〔印記〕「東禅」「醍醐寺」
〔後表紙〕紺色
〔折敷〕三十四折
「（六七六頁）
（六七七）

明らかに福州東禅寺版の『宗鏡録』卷七十二である。ところで、近時（正確には平成二十八年十一月現在も）、ネット上に次のような書影が確認できたのである。

<http://datacollection.sina.com.cn/index.php?p=data&source=default&a=item&id=1000437>

簡略な紹介事項を記述する。

「慧日永明寺主智見禪師延壽集 宗鏡録卷第七十一 全
北宋大觀二年（1108）福州等覺禪院刻崇寧大藏本
1函1冊 紙本

提要：首有大觀二年年号、后有「福州東禪寺經生林受印造」、
原裝靛青色護封保存完好。描金題録「宗鏡録卷第七十一」。
字口銳利為初印之本。一折六行十七字上下单辺。品相保存
完好。」と。十一板全て書影を確認でき、資料的な価値は
高い。

この書影から確認できる書誌事項を記述すると、以下のようになる。

〔譯撰者〕 慧日永明寺主智見禪師延壽集

〔外題〕 宗鏡録卷第七十一 策（金字）

〔内題〕 宗鏡録卷第七十一 策

〔尾題〕 宗鏡録卷第七十一 策

〔表紙〕 紺色

〔後表紙〕 紺色？

〔紐〕（缺）

〔折敷〕 三十四折（前

見返し含む）

〔題記〕 福州等覺禪院住持傳法沙門普明収印經板頭錢恭

爲／今上皇帝祝延 聖壽闔郡官僚同資祿位彫造

／宗鏡録一部計一十函 時大觀二年六月 日謹

題

〔捨錢刊記〕（無）

〔刻工名〕 丁宥〈一〉〈二〉〈四〉〈八〉〈十〉、宥〈三〉〈五〉

〈七〉〈九〉、

丁宥刊〈六〉〈十二〉

〔卷末刻紙数〕 十一昏

〔印造印〕 「福州東禪寺經／生林受印造」

〔印記〕 首尾「能仁禪寺大藏」各一顆、一板第二面眉上

横に印「」削り痕あり。

一板第二面眉上横に墨印「」削り痕（うつすらと白く見える横長方形）あり。印の墨単辺枠線が、かすかながら眉上に天辺横単辺界線に沿って認められる。

「福州東禪經／生林受印造」墨文印造印

以上の書誌事項を見るに、「醍醐寺蔵『宗鏡録』」卷七十一と明らかに同版である。異なるのは、印造記と印記のみである。即ち、同じ板木を以て摺り手を異にして刷印、更に所蔵したところも異にした一本が出現した、という事実に過ぎない。東禅寺版で中国に所蔵するもの多くが、鎌倉期以降に日本に将来された大蔵經のいわゆる里帰り本である。おそらく、近年の里帰り本と思われ、取えて採り上げることもないことがらであろう。しかし、その首尾に捺された「能仁禅寺大蔵」各一類の印記は看過しがたい重要な事実を教えてくれる。「能仁禅寺大蔵」印については、「醍醐寺蔵宋版一切経首解題」に次のような記述を見るのである。

「」 印記

この一切経には、朱印又は黒印が主として巻首、一部は紙背に捺されている。中図で捺されたものとしては、開元寺版には「開元経紙」の朱長方印かおり、東禅寺版には、「東禅」(單廓と無廓)の朱方印、一部の経巻に「能仁禅寺大蔵」の黒長方印が、この順序で捺されている。又、「東禅大蔵」の朱長方印の二種と朱方印も存し、朱長方印の一種は紙背に捺され、別に「東禅染経紙」の朱長方印と「皿サの朱方印」ち存する。「東禅染経紙」「ルヤ」の文字からは、黄染の料紙が東禅寺版専用の料紙として漉き出されていたことが知

られる。「開元経紙」からも開元寺版専用の料紙が漉き出されていたことが考えられる。

日本に伝来してから捺されたものに、「醍醐寺」の黒長方印がある。字體や法量から見て、十餘種が存したらしい(第四節、印記参照)。「醍醐寺」黒印の捺される箇所は、巻首が多いが、谷中や巻末・紙背、稀に小口に捺されることもある。黒印の代りに「醍醐寺」を墨書されることもある(第一冊17頁)。

また、80～81頁には、「蔵書印等」の中で「中国で捺された各種の印」として、「能仁禅寺大蔵」(縦七・二糧、横一・七糧、單廓)黒長方形印」を挙げて次のような記述がある。

「主に巻首に捺し、巻中・巻末・小口にもある。「東禅」朱印と並存することも多く、順序はその後に捺している。第六十一函、放光般若経巻第一を始めとして、第四百四十四函、持世経巻第三、第四百六十六函、求法高僧傳巻上、他にある。(別冊影印篇第一部絵用写真聚影二〇頁)」

函番号の61・144・466の四函、經典の放光般若経巻第一・持世経巻第三・求法高僧傳巻上の三点を例として挙げるのみである。実は、『醍醐寺叢書 醍醐寺蔵宋版一切経目録』を頼りに「能仁禅寺大蔵」(縦七・二糧、横一・七糧、單廓)印のある函・經典の点数を数えると、61函～104函、108函～

119函、122函、138函、140函、162函、164函、466函、503函、606函、581函、588函、合計103函の全ての帖冊が「能仁禪寺大蔵」印を捺しているようである。帖数にして優に一千帖を越えるわけで、全体の約六分の一を超えて形成される量である。

いわば、「能仁禪寺」旧蔵の大蔵経を想定することも可能であり、「能仁禪寺大蔵」印の無い約六分の五の分量を占める非「能仁禪寺」蔵の一群の大蔵経との取り合わせに拠って形成された大蔵経が、現存する醍醐寺蔵宋版一切経と考えることも不可能ではない。今回の中国のネット上に出現した首尾に「能仁禪寺大蔵」各一顆を捺した『宗鏡録』巻七十一は、日本に舶載されずに中国側に残存していた「能仁禪寺」旧蔵の一点と仮定すれば、彼我に分かれて流伝残存した誠に稀有なケースとして珍重すべき発見になろう。しかし、天理大学附属図書館蔵『大寶積経』巻第一百七を例に挙げるならば、首尾に「能仁禪寺大蔵」各一顆を捺した『宗鏡録』巻七十一も又、醍醐寺旧蔵の一点であることに落ち着くのである。近年の古渡の中国仏書が大量に、いわゆる「里帰り」している事例の一例として考えるべき一件である。首に「能仁禪寺大蔵」一顆を捺した「能仁禪寺」旧蔵の一点、天理大学附属図書館蔵『大寶積経』巻第一百七をかつて紹介したことがある（牧野和夫「日本舶載東禪寺版一切経の刊・印・修をめぐる一、二の問題・補遺」

〔『実践国文学』62号 2002・10〕。書誌的な事項の簡紹箇所を再掲出する。

「天理大学附属図書館蔵（醍醐寺旧蔵）『大寶積経』巻第一百七 東禪寺版

表紙：原裝経帙紺表紙、外題金字「大寶積経卷第一百七」

内題：大寶積経卷第一百七
版式：天地横单辺界線（第一板界高約二四・六糎）、無界

每面六行々十七字。

- 1板 第1・2面間ノド、「文 一百七卷 一 林国華」
- 2板 第1・2面間ノド、「文 一百七卷 二 林国華」
- 3板 第1・2面間ノド、「文 一百七卷 三 林国華」
- 4板 第1・2面間ノド、「文 一百七卷 四 陳孟」
- 5板 第1・2面間ノド、「文 一百七卷 五 ナシ」
- 6板 第1・2面間ノド、「文 七卷 六 安撫賈侍郎捨俊」

7板 第1・2面間ノド、「文 七卷 七 文／（3・4面間）泉州施主捨」

- 8板 第1・2面間ノド、「文 七卷 八 寶」
- 9板 第1・2面間ノド、「文 七卷 九 正」

10板 第1・2面間ノド、「文 七卷 十 鄭容為 妣翁

二娘 捨」

11板 3面ノミ「福州東禪經／生陳宥印造」(单杵)。

首に单杵方印「能仁禪寺大藏」、下に单杵方印「東禪」。

1板 2面眉上横向きに单杵「(削り消つ)」(5・0×2・1糶)、おそらく「醍醐寺」と。

天理大学附属図書館蔵『大寶積經』卷第一百七を醍醐寺旧藏と推測した最大の根拠は、「1板2面眉上横向きに单杵」(削り消つ)「(5・0×2・1糶)」という印記痕である。

第一板第二面眉上横向きに单杵墨文印「醍醐寺」を捺す例は、醍醐寺藏宋版一切経に枚挙に遑ないくらい多い。『醍醐寺叢書 醍醐寺藏宋版一切経目録』別冊影印篇の「第一部口絵用写真聚影」4頁下段「東禪寺版 放光般若波羅蜜經卷第一(第六十二函)」、5頁下段「東禪寺版 阿毘達磨藏頭宗論卷第十九(第四百六函)」、6頁下段「東禪寺版 仏説大堅固婆羅門縁起經卷上・下(第五百六十四函)」に掲出された書影などは、その好例である。首に单杵方印「能仁禪寺大藏」を捺した点と併せて、天理大学附属図書館蔵『大寶積經』卷第一百七を醍醐寺旧藏と判断したのである。今回の中国のネット上に出現した『宗鏡録』卷七十一も全く同様に、第一板第二面眉上横に印「」削り痕があることは明らかであり、首に单杵方印「能仁禪寺大藏」を捺

してある点と併せるならば、醍醐寺旧藏宋版一切経の一点と判断して誤らないものである。

印造印はどうであるか。「福州東禪寺經／生林受印造」については、『醍醐寺叢書 醍醐寺藏宋版一切経目録』第一冊、「醍醐寺藏宋版一切経解題」74頁に第三表として「印造者と印造帖収納函一覽」が掲載され、印造者「林受」の項に、次のように「印造帖収納函(題記の年紀)」が列記されている。

「489(元豊三)、142/146/489/雑6(元豊八)、256(紹聖二)、358(元符二)、372/78(元符三)、387/410(建中靖国元)、401(建中靖国元、癸卯捨)、428/468(崇寧元)、448(崇寧二)、468/470/474/475/雑19(崇寧三)、496(崇寧五)、521/余2(大觀二)、564(政和二)、570(乾道六)、570(乾道七)、570(乾道八)、570(乾道九)、570(淳熙元)、570(淳熙二)、196(年紀未詳)」

である。林受が担当した板木は「安撫使賈侍郎捨」錢の補刻の板木が多く、146・489・雑6・378・468・474・196函に収まるものである。特に注目されるのは、474函(千字文番号「集」)『弘明集』卷第五の十一板である。十一板の書誌情報「〔捨錢刊記〕安撫使賈侍郎捨」「〔刻工名〕茂」「〔版心刻注記〕丙辰」「〔印造印〕福州東禪寺經／生林受印造」

である。「版心刻注記」丙辰」、即ち慶元二年（1196）以降のある時期に刷り手の林受が刷印したものであり、七帖すべてに林受の印造印が捺されている。集字函のすべての帖に、「能仁禪寺大藏」印がなく、前述の分類でいえば、非「能仁禪寺」旧藏の系列の大藏経に該当する。

また、一字刻工名「茂」については、既に牧野和夫「日本現在（南宋）刊『大藏一覽集』について」（本誌86号2014・10）で指摘したように、刻工「江茂」であり、本源寺藏宋版一切経・金沢文庫藏宋版一切経のいずれにおいても、「丙辰」という時期に「江茂」が東禪寺版大藏経の補刻事業に係わっていることの確認がとれるのである。非「能仁禪寺」旧藏の系列の大藏経の刷印に携わった印造者（印工、一般的には刷り手）にも「林受」がいたのである。『宗鏡録』巻七十一の二点の刷印時期はほぼ同時期、少なくとも三、四十年の隔たりは想定しがたいものであることも疑いない。

これらの情報に、中国のネット上に出現した『宗鏡録』巻七十一の情報を加えるならば、ある時期の醍醐寺の寺域内に、最低二点の東禪寺版『宗鏡録』巻七十一（しかも同版でほぼ同一時期の刷印に係る）が存在していたことが確実に分かった。一点は、全体の約六分の一を超えて形成される分量の、「能仁禪寺」旧藏の大藏経の内の一点で現在は

中国のネット上に公開されており、一点は「能仁禪寺大藏」印の無い約六分の五の分量を占める非「能仁禪寺」藏の現醍醐寺藏の一点である。

このように、aで検討した如く、少なくとも鎌倉中後期頃の醍醐寺には二セットの宋版大藏経が、上・下醍醐に各々備えられていたようであること、bで推測した如く、ある時期の醍醐寺の寺域内に、最低二点の東禪寺版『宗鏡録』巻七十一（しかも同版でほぼ同一時期の刷印（第二、三次補刻葉はない）に係る）が存在していたことがほぼ確実に分かったこと、この二点の事柄はどのように考えるべきか、抱えるに至った一つの看過しえない大きな課題を提示するのみである。

三、結びにかえて

―律三大部注疏記の印面調査による補訂―

本誌89号（2016・3）に「中世文学史の一隅」を掲載して、副題に「（旧稿の補遺を兼ねて）」としたのだが、ここに更に補遺を加える。次のような結びに対する補遺である。

「以上、王公祠堂本という紹興壬午の奉納施入記が存す

る東禪寺版大藏經の印面・破損・補写について検討し、ほぼ同じような印面・破損・補写の状態を『四分律含注戒本疏行宗記』などで示した。書陵部蔵『四分律含注戒本疏行宗記』は、東寺蔵『四分律含注戒本疏行宗記』より後刷りであるが、かなり近い頃の摺りで、およそ嘉熙二年（一二三八）以降の間もない頃に刷られたか、と推定できるものである。刊行時期より既に百有余年はゆうに経っており、その間に補写・補刻・入れ木などなど、様々な修が行われてきたのである。王公祠堂本の東禪寺版の大般若經もまた、紹興三十二年に至る間にほぼ板木の補刻は全面にわたり、その補刻葉に既に検討したような破損・補修が行われていたことになる。」（49頁）

とりわけ「書陵部蔵『四分律含注戒本疏行宗記』（『行宗記』と略称）は、東寺蔵『四分律含注戒本疏行宗記』より後刷りであるが、かなり近い頃の摺りで、およそ嘉熙二年（一二三八）以降の間もない頃に刷られたか、と推定できるものである。」という一文には、その後の複数個所の印面に対する熟覽調査の機会を得て補訂の必要が生じたのである。

書陵部蔵『行宗記』の天地横の界線、即ち匡郭部分には多くの切れ・割れが生じ、幅約0・2糎ほどの空白が顕著に認められる。それらの界線の切れ目が、東寺蔵『行宗記』

では連続して繋がるケースが比較的多いことを実見できた。書陵部蔵本が、東寺蔵本に比して少なからぬ歳月を経過した時点での刷印、即ちかなりの後印本であることを確認できたのである。特に、『四分律刪繁補闕行事鈔』卷中之三、第十五板末行「且住一処……聲大唱」の一行分は、書陵部蔵本では刷印無く（おそらく、板木端部分の損傷に因る）、宋人の手に係る墨補写を以って補填する（本誌89号「中世文学史の一隅」頁47下段図版参照）が、東寺蔵本では天地横の匡郭部分に幅約0・2、3糎の割れ目を有するも判読可能な十九文字が刷印されているのである。明らかに、東寺蔵本が刷印において先行し、かなりの年月の経過後に、書陵部蔵本が刷られたことが確実になったのである。

書陵部蔵本に認められる「四明姚家／印造經書」など、明州の姚家という経鋪が印刷を担った時期は、東寺蔵本の刷印時期である嘉熙二年（一二三八）に程遠からぬ頃ではなく、かなり下った時期の刷印であり、寺院内の刷印という営為が門前（經書鋪が軒をつらねる街区なども）などの経鋪へ移行する頃に該当するようである。丁度、金沢文庫蔵宋版一切経や書陵部蔵宋版一切経などに、寺院所属の經生による印造記が一切捺されなくなる時期（十三世紀中後期頃か）とも重なるのではないだろうか。

かくて、印面の複数個所の比較熟覽という作業が今後の

調査には望まれることになってきたのである。

* * *

本稿をなすに当り、貴重な典籍の閲覧調査・部分引用の御許可を頂きました東寺当局・同宝物館に対し、深謝申し上げます。

また、本稿は、平成二十八年科学研究所費・基礎研究（B）（課題番号・26284040）の助成による成果であることを附記する。長きにわたる福州版一切経調査に格別な御高配を賜わってきた醍醐寺・知恩院・本源寺の各位に深甚の謝意を表する次第である。

* * *

なお関連して、牧野「自写」經典の宋の地における開版」（2016年度和漢比較文学会特別例会『和漢比較文学研究會・論文集』〈二〇一六年八月二十一日、於台湾大学〉）、同「延慶書写時の延慶本『平家物語』へ至る一過程―実賢・実融―一つの相承血脈をめぐって―」（『アジア遊学・根来と延慶本「平家物語」』近刊予定）、同「中世聖徳太子伝記と成阿弥陀佛―橘寺と速成就院を起点として―」（『説話文学研究』52号 近刊予定）があり、併せて御参照頂ければ、幸である。

（まきの かずお・実践女子大学教授）